

保護司国際研修に参加して

前橋保護観察所 保護司 久保田つね子

平成24年1月23日、24日の両日にわたり、国連アジア極東犯罪防止研修所（アジ研）で開催された、保護司国際研修に参加させていただきました。

これは平成24年1月12日から2月9日まで4週間にわたり開催された、アジ研の第150回国際高官セミナーの一環として行われたものです。

研修に参加されている方々は、アジアを中心とした世界7か国からの参加者（検察官、判事、弁護士、法務省職員、警察職員）と、日本からの参加者（判事、検事、入国警備官、海上保安官、矯正職員、保護観察官）がこの期間、食住を共にし研修をされていました。

私は全国各地から参加した6名の保護司の方々とともに、2日間研修をすることになりました。

研修の目的としては、保護司にアジアを中心とする諸外国における犯罪者処遇に関する諸問題について研修するとともに、国連アジア極東犯罪防止研修所で実施する国際研修参加者に対し、保護司との対話等を通じて日本の保護司制度及び保護司の活動等について紹介することでした。

初日は午後からのスタートで、受付を済ませて荷物を部屋に置いた後、国際会議場へ行きました。

そこで初めてすごいところに来たんだなどの思いで、心臓がドキドキしました。

研修が始まり、同時通訳により7名の保護司が各自自己紹介をし、その後それぞれの保護司活動や、自分が扱った事例について5分ずつ発表しました。

発表が終わると、研修に参加されている方々、特に外国の方から質問があり、それに答えることになりました。質問としては、「保護司活動を国がどのようにバックアップしているのか」「保護司の研修等はどのようにしているのか」「対象者に精神的な病気があるときに保護司はどうして病院に連れて行かないのか」「罪を犯した少年をなぜ学校は退学にするのか」「フィリピンでは初犯者のみが保護観察を受けられるが、なぜ日本では何度でも保護観察を受けられるのか」などでした。

それぞれの保護司が質問に答えながら意見交換をすることができました。自分も質問に答えることができましたが、終わった後に「ああ言えばよかった、これを言えばよかった。」と悔いの残るものでした。しかし、研修が終わり夕食の席では、日本の研修参加者やアジ研職員の通訳により、外国の方々とも研修の時には話をすることができなかった保護司活動についても和やかな中で話ことができました。また、同席していた外国の方の話も聞くことができ、とても楽し

いものでした。

その後、ラウンジに行き、カラオケなどで盛り上がりながら研修参加者全員で親睦を深め、楽しいひと時を過ごすことができました。

ちょうどその時雪が降ってきて、雪を見たことのない国の方がほとんどだったため、この自然現象のサプライズには全員がびっくりするやらうれしいやらの大騒ぎの夜でした。

2日目は外部専門家の講義聴講で、講義をしていただいたのは国際移住機関（IOM）のウィリアム・バリガ氏でした。今回の高官セミナーの大きなテーマは「人身取引—予防、訴追、被害者保護及び国際協力の促進」でしたが、バリガ氏は「人身取引へのIOMの対応」というタイトルで講義をされました。

日本ではあまり耳にしないテーマというか、ほとんどの人が気にもせず、「他の国の事柄」と思っていることでしたが、聞くこと全てがとてもショッキングな内容でした。

特に驚いたのは、「人身取引」について、アジアや中南米諸国は人身取引が頻発している地域の一つで、アジアの経済大国である日本は、主要な人身取引の目的国（受入国）であることでした。私は二人の同時通訳の話を聞いているだけでしたが、研修に参加されている方々は真剣に研修に取り組んでおられ、いろいろな質問をされる中で、ウィリアム・バリガ氏との意見交換はとても迫力があり、聞いているだけでもドキドキするものでした。

今回の講義や意見交換を通じて、諸外国の保護観察制度のあり方や、人身取引の実態を知ることができたとともに、日本においてアジ研の果たす役割の大きさを実感しました。

最後にこのような貴重な研修の機会を与えてくださった関係者の皆様に深く感謝し、これからも保護司として経験を積み重ね、取り組んでいきたいと思えます。

（担当教官より）

保護司国際研修は、法務省保護局とアジ研が共同で実施している研修で、保護司の皆さんに、犯罪者処遇に関する海外の話題に触れ、また、諸外国の実務家と交流する機会を提供することを狙いとしています。

保護司国際研修は、アジ研が毎年行っている海外実務者向けの研修プログラムに1泊2日の日程で組み込まれており、保護司の皆さんには、海外参加者との意見交換、講義の聴講などをしていただいています。今回は、アジ研の第150回国際研修開催中の平成23年1月23日から24日にかけて、全国から

7名の保護司の方々に参加していただきました。

久保田保護司の感想文の中でも触れられていますが、我が国の保護司制度に対する海外参加者の関心は高く、意見交換では、「対象者から怪我をさせられることはないのか」といった素朴なものに始まり、毎回、多くの質問が寄せられます。保護司国際研修は、このような交流を通じて、日本独自のものである保護司制度や保護司の活動について、海外参加者の理解を深める貴重な情報発信の機会となっています。